The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞Niklas Luhmann, ”Love : A Sketch”, Polity, [2008]2010.
Author(s)	川本, 悟士
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 19-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51230
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Niklas Luhmann,
Love: A Sketch,
Polity, [2008]2010.

川本 悟士

500――ルーマンの著書と論文の合計は、この数を超えるともいわれている(Borch 2011)。彼の言葉は死後15年以上たった今なお、本書のような“遺作の刊行”というかたちで増殖を続けており、最終的にはもっと多くなるのだろう。村中知子（2005）によれば、彼自身は多くの著作のなかでも、『社会システム理論』と『情熱としての愛』を推したという。本書は、後者と同じ「愛」というテーマについて、その10年以上前に書かれたものである。編者のKieserlingによれば、ルーマンがビューレフェルト大学に勤めだした1969年頃のもので、ゼミナールのために用意したものだという。索引を含めても100頁に満たない小著だが、ルーマンの思考が十分に窺える一冊である。

冒頭で著者は、愛という現象は重要な社会的事実で、古くからの文学のテーマである一方、洗練された社会学的研究はなされていないという。そして、愛が社会システムのなかで果たす機能こそが本書の関心であると明示し、その後の五つのパートで本格的に議論を進めていく。

第一部では、著者の問題関心の大枠が提示され、コミュニケーション・メディアという概念を軸にして論じられていく。ここで著者は、“世界は現実に起こっている以上の可能性をもった、ほかでもありえた不確実な存在である”とする立場から出発し、そのような複雑性のなかで意味の受容を一方向に収斂させるメカニズムを主張する。それが、コミュニケーション・メディアである。

コミュニケーション・メディアとは、実際の構造や過程ではなく、収斂させるという、まさにその機能によって定義されるものだという。その機能は、多様な選択肢のなかから何かを／どういうわけか選択するという、選択と動機のメカニズムに現れる。具体的には、貨幣や愛などのように、その存在によって人が何かしらの秩序や選択をどういうわけか受け入れ、「ほかでもありえた」の世界を「ほかにはありようのないもの」として捉えられるようにするものを指す。彼によれば、これらコミュニケーション・メディアは相互に自律的で、互いに代替可能な部分はほとんどない。また、愛をコミュニケーション・メディアとして分析する際には、愛という概念が展開するなかで生まれるさまざまな変容――その機能が利用されるようになるあり方(way)、その表出する可能性、社会のなかに取り込まれるかたちとその結果生まれる事態などの変容――を解釈することが重要であるという。

第二部では、それらの変容に注目しながら、愛という具体的なコミュニケーション・メディアの歴史的発展について論述される。著者によれば、古代ギリシャ文学の黎明期において、愛を表す基本的な言葉は

形容詞（親しいphilos）としてしか現れないという。それは、血縁などの限られた関係を示すものであり、「親密であること」や「相互に信頼していること」を表していた。また、物や動物、それらの物質性や身体性に用いられることもあった、そんな言葉だった。その後、名詞（友愛philia）が用いられるようになったが、基本的に近代初期になるまで、今日のようには自律的でなかったという。

著者は、愛の概念における大きな転機を、情熱という概念と結びついたことに見出している。元来、「情熱」という言葉は、能動的な状態というよりもむしろ、受動的に降りかかってくる、完全には免責されないものの自分では抗しえないような状態を表していた。しかし、情熱が誰にでも普通に起こりうるものとして認識され、結婚前には恋愛関係に当然あるだろうと予期されるようになると、状況は一変したという。非理性的なものとして考えられていた情熱的な愛が、慣習的なものと認識されるようになったことで、慣習化した愛はそれ自体によって正当化されるようになる。それにともない、親密な関係は社会的に分化し、そのなかでコミュニケーション・メディアとしての機能が生じるというわけである。

情熱的な愛が慣習として根づくには、前提としてパートナーを選ぶ自由が必要である。階層と個性が一定以上切り離され、社会側からの規制がゼロではなくとも、誰をも好きになる可能性があり、そして誰もと結婚に至る可能性がなければ、情熱としての愛が展開されることはない。しかし、その自由は同時にさまざまな不確かさを生む。そういった不確かな状況で拠り所とされるのが、愛という感情それ自体であるという。愛や人生において個人の感情による選択の自由が認められるようになるのと並行して、自身の選択で紡がれた愛や自己実現に強く価値が見出されるようになるというわけだ。そして、愛に価値が定着し、自明的に重要であると認識され、愛することそれ自体が目的として確立して愛されるようになると、自由もまた定着していく。このようにして、愛というコミュニケーション・メディアは自己増強的に自律性を高め、個人の情熱にもとづいてパートナーを選択することは、結婚して家族をつくるという一種の社会的機能としてみられるようになるのだという。

著者によれば、こうした“結婚の素地としてのロマンチックラブ”が慣習化するのは近代以降であり、このようにして愛は、個人の経験という予期不能なものから社会的に予期されるものへと変貌したという。

第三部では、こうした愛というメディアと、性愛(sexuality)の関係が論じられていく。著者はここで、愛の関係の機能的自律に伴い、恋人の間での性愛の関係も新たな地位を獲得するとする。つまり、性愛はコミュニケーション・メディアに組み込まれ、その結果、生殖という単なる機能をはるかに超えた社会的機能(societal function)を獲得するというわけだ。

それは、次のように導出される。愛にもとづいた性愛関係は、パートナーをより限定的にし、その限られたパートナーとの直接・近接的な関係の構築をもたらす。またそれは、経験を共有しているという予期を非常に確からしい水準で可能にする。加えて、性愛関係にあるもの同士はそうした非言語コミュニケーション・肉体的な接触によって、言語的なコミュニケーションを補完する。こうして、次第にその関係は内へと閉じていく。いいかえれば、情熱的な愛によって結ばれた恋人同士は、その愛という感情そのものに依拠しながら、性愛を足がかりに外部から閉じていき、分化して自律的な関係を紡いでいく。それが“愛にもとづいた家族”という親密な関係の一般化と結びつき、ロマンチックラブというかたちで、社会のな

かで分化していったというわけである。ここから著者は、情熱の性愛的基礎は愛というメディアにとって不可欠であるという。すなわち、感情そのものに依拠して生み出されていく情熱的な愛の関係が、性愛的基礎を取り込んで社会的に分化し、その分化それ自体によって、自己増強的に愛という関係が強化されて市民権を得ていく…と、このようにして愛はコミュニケーション・メディアとして自律するというのである。

第四部と第五部では、愛の関係の自律化によって生じた困難について論述される。上述のように、情熱的な愛の成立は社会の機能的分化など数多の情況に依拠しており、これにもとづいて結婚・家族形成を行なうことは個人的・社会的リスクを伴う。

たとえば著者によれば、性的な関係へと連なる情熱的な愛が見出される場所は、家族という持続性をもつシステムが生まれる瞬間であった。しかし、情熱それ自体は極めて不安定なシステム原理である。また、愛の関係が生まれる背景にはパートナーを自由に選べる状況が必要だが、それは“パートナーがみつかるとは限らない”というリスクと表裏の関係にある。そのような矛盾を、制度化された(institutionalized)愛は多々含んでいる。さらに、情熱という衝動的な感情に頼る以上、家族というシステムの基礎になることはその衝動性と持続性との間で矛盾をひきおこす。その意味で、「社会システムの構造化原理(structuring principle)として、愛は機会とリスクを同時に促進する」(51頁)のである。

とはいえ、著者はそこからロマンチックラブを頭ごなしに否定するわけではない。たしかに、現実に社会では離婚率は上昇している。だが、それは「社会を脅かすレベル」(52頁)には達しておらず、総じてみると現在でも愛による結婚は「絶え間ない高度な安定性」(52頁)を有して、衝動的な情熱よりも長く続いているという。

このような「情熱的な愛が定着した愛に変化する」(53頁)仕組みのキーとして、著者は「予期の予期の予期」という三段階の再帰性(three-stage reflexivity)をあげる。互いの予期の衝突から相互行為のコンフリクトへと至るような〈互いに予期の応酬をしている〉という状態を超えて、“当事者でもある第三者”的視点から“〈互いに予期しあっている〉という状態を予期すること”により、それを乗り越えていくこと。それが、愛の定着にとって重要だというのである。これは、ある意味で不完全な神の視点であり、非常に高度なバランスの上にある。コミュニケーションをはじめとしたさまざまなかたちでの補完を抜きには、成り立ち得ない。それが、愛の関係において性愛の基礎づけという支えや予期という再帰性が必要不可欠な理由である。これゆえに、「重要なことは一緒に何をなすかではない。何かを一緒になしているというまさにその事実が重要なのである」(60頁)。

著者はほかの観点からも、この到底成り立ちそうにない制度(institution)である愛が、なぜこのように安定しているのかについて分析を試みている。そこでは、“愛の証明(proof)は何か”や、“愛という関係をどのようにして学習するのか”という問題がとりあげられる。それらに対し著者は、たしかに何によって確からしさを得るかは難しいが、逆にその確かさを求めて結婚への決断が後押しされると指摘する。また、適切な供給源は欠如しており、結局「偶然の一致(coincidence)」(69頁)に委ねるよりほかにないという立場をとる。ある意味でこれらの点は、愛というコミュニケーション・メディア成立の帰結の一部を、個人が背負う構図であるといえるだろう。

情熱的な愛が慣習化し市民権を得ることで、愛は自明的に重要なものと認知されるようになる。それが性愛によって基礎づけられながら強化され、やがて恋愛を経た結婚というロマンチックラブに落ち着いていく。事実の連鎖と、その再帰的な自己増強的作用による愛の自律過程の刻出。これが、本書の大枠である。第一部で述べられた変容の注目点と並べるなら、ありえそうもない愛という事象に目を向け、生殖という単なる機能を超えた、愛にもとづいた家族という社会的機能を獲得するまでを、その帰結とともに描いているといえる。講義ノートゆえにあまり明示的ではないが、一種のモダニティ論ともいえるだろう。

興味深いのは、愛の変化を行為の観点によってではなく、システムの機能の観点によって捉えようとしている点である（42頁）。換言すれば、ミクロとマクロを直接的に接続するのではなく、ミクロな領域に属するコミュニケーションを、その“舞台”であるマクロ的な文脈との関連を踏まえ、概念によって架橋する試みである。土場学（1993）も指摘しているように、これは社会変動を捉える上で重要な切り口になりうるものだ。そのように「心理システムのレベルと社会システムのレベルを連結しているメカニズム」（土場 1993:318）に焦点が当てられていることを踏まえるなら、“舞台”の上で生まれた今までの事実の連なりに再帰的にもとづいて、たちあらわれてくる複雑に編まれたさまざまな可能性を一定の方向へと読めるようにする、その文脈の読み方・公式のようなもの。それが、コミュニケーション・メディアである。そして、コミュニケーション・メディアの自律過程そのものが、ルーマンのメガネを通した近代化のひとつの有り様である。

ただ、Blatterer(2011)が指摘するように、離婚が社会を脅かすリスクだと捉えられている点など、本書もまたさまざまな時間軸の上にあることを忘れてはいけない。

20世紀半ばという書かれた時点の社会背景から離れても、そうだ。たとえば、ルーマン自身の研究の文脈に本書を置いてみよう。冒頭にあげた『情熱としての愛』（以下LP）と比較すると、基本的にLPの叙述のほうが細かいことがわかる。本書のロジックが補填されたものがLPである、といいかえてもよいだろう。情熱という概念をみても、「『情熱』は、自分自身が能動的状況ではなく受動的な状況化に苦しんでいると自覚するような状態を意味している」（25頁）という言葉をはじめ、本書では概して、簡潔に述べられるにとどまっている。一方、LPでは情熱という概念の歴史に対してより詳しく寄り添い、その意味の転換も詳細に述べられている。また、本書では三段階の再帰性の重要性があげられていたが、LPではそのようなコミュニケーションについての議論も、より段階をおって幅広く丁寧に行われている。さらにいえば、LPで一層深化したとうけとれる部分もある。上記のように、ルーマンは本書において、ロマンチックラブにもとづいた近代的家族に対して一定の安定性を認めていた。しかし、LPでは基本的姿勢は維持されつつ、結婚をしない同棲という現象にも目が向けられている。これは、土場(1993)が指摘しているような近代家族の変容――「移行期のもの」への変容――の兆しを、ルーマンがその視界に捉えつつあることのあらわれだとみることもできる。そこから、議論が一層の深まりをみせているということも可能だろう。

このように、本書においては、さまざまな時間軸上に位置していること、“1969年のルーマンの言葉”であること、それらを無視できない。社会的時代背景と不可分であることはもとより、本書は一面でLP

の「素描（スケッチ）」になっているからだ。

ここから、本書を「粗い」と断じることもできなくはない。だが、私自身はむしろその熟成する前の粗さを積極的に評価してもよいと思う。

みてきたように、元来ルーマンは、経験的分析への鋭い洞察力をもっている。現実との距離に敏感な社会学の学問的紀律的（ディシプリン）にも、そのスコープは貴重な財産だろう。だが、ルーマンを読む際にはしばしば頭の痛くなるような術語が登場し、結果、独特の抽象的な世界に引っ張られてそれを見失ってしまう。本書のような、現象を大きく「粗い」かたちで扱ったルーマンに触れることの意義は、それを見失わないためにこそ、あるのではないだろうか。

その意味で、本書はその後の展開へと連なる問題関心、論理展開、そういったものの「素描（スケッチ）」でもある。本書の立ち位置や思想財を経ることで、彼についての解釈はより精緻化されうるし、ほかの著作を解釈することで、本書で得られた財産はまた読み替えられうるだろう。この再帰的な自己増強的運動自体は、きっとルーマンに限られたことではない。ただ、ひとまず今私にできることは、このような「素描（スケッチ）」がこれからも増殖するよう願うことだけなのだろうと思う。

参考文献

Blatterer, H, 2011, “Book Review: Niklas Luhmann, Love: A Sketch, Edited by A. Kieserling and Translated by K. Cross. Cambridge: Polity, 2010.” *Media, Culture & Society*, 33(5):801–4.

Borch, Christian, 2011, *Niklas Luhmann*, New York: Routledge.

土場学 , 1993,「愛というメディア――社会変動のゼマンティーク」『社会学評論』44(3):314–29.

Luhmann, Niklas, 1982, *Liebe als Passion: Zur Codierung von Intimität* , Frankfurt: Suhrkamp.（= 2005，佐藤勉・村中知子訳『情熱としての愛――親密さのコード化』木鐸社.）

村中知子，2005，「訳者解説Ｉ」佐藤勉・村中知子訳，『情熱としての愛――親密さのコード化』木鐸社 , 274–282.（= Luhmann, Niklas, 1982, *Liebe als Passion: Zur Codierung von Intimität* , Frankfurt: Suhrkamp.）